

日韓歴史共同研究を素材に、歴史認識に関わる交流の課題を考える

一橋大学 糟谷 憲一

はじめに

本報告では、一九九八年度から二〇〇五年度まで八年にわたって行われてきた、一橋大学・ソウル大学の歴史研究者を中心とする「日韓歴史共同研究」の経緯について紹介するとともに、この「歴史共同研究」の経験をふまえて、日韓間の歴史認識に関わる交流を進めるに当たって、どのような課題が存在しているかについて、私見を述べることにしたい。

一．日韓歴史共同研究の経緯

一橋大学とソウル大学の歴史研究者をそれぞれ中心とする「日韓歴史共同研究」が始まったきっかけは、一九九七年八月に一橋大学・ソウル大学のホッケー部の交流試合のためにソウル大学校を訪問した一橋大学経済学研究科の中村政則教授（ホッケー部顧問であった）とソウル大学校の白忠鉉・李泰鎮・金容徳教授とが会談し、両大学の有志で「日韓歴史共同研究」を進めることで合意したことであった。この会談には、一橋大学の同窓会組織である「如水会」の研修文化委員であり、ホッケー部のOBであった石川直義氏も同席した。まず第一回は、両国の高校歴史教科書を検討し、その結果を一九九八年に開催するシンポジウムで報告することとなった。

一橋大学では、中村氏の提案を受けて、池享（経済学研究科）、吉田裕、渡辺治、加藤哲郎、田崎宣義、渡辺尚志、若尾政希、糟谷憲一、ハーバート・P・ピックス（以上、社会学部「二〇〇〇年四月から社会学研究科」）が、この共同研究に参加することになり、学外から石川氏、半澤健市氏（一橋大学社会学部卒業、のち神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科院生）が加わった。この日本側の「日韓歴史共同研究プロジェクトチーム」研究会は一九九七年二月から活動を開始し、「韓国の歴史―国定韓国高等学校歴史教科書」（明石書店、一九九七年、『高等学校国史』一九九五年版の日本語訳）を検討した。また、三菱財団に助成金の交付を申請し、その結果、平成一〇～一二年度に三菱財団人文科学研究助成金、ソウル大学・一橋大学歴史共同研究（総額四〇〇万円）を交付されることとなった。その研究代表者は一九九九年三月まで中村政則であり、中村教授の定年退官により一九九九年四月以降は糟谷が担当した。

韓国側では、白忠鉉（ソウル大学校法科大学教授、国際法）を代表として、金容徳（ソウル大学校人文大学教授、日本近現代史）、李泰鎮（ソウル大学校人文大学教授、韓国近代史）、権泰楹（ソウル大学校人文大学教授、韓国近代史）、金基奭（ソウル大学校師範大学教授、韓国教育史）、南基鶴（翰林大学校人文大学教授、日本中世史）、盧泰敦（ソウル大学校人文大学教授、韓国古代史）、都珍淳（昌原大学校人文大学教授、韓国現代史）、張寅性（ソウル大学校社会科学大学教授、近代東アジア思想史）などが参加した。韓国側では、日本の山川出版社発行の高等学校教科書『詳説日本史』『詳説世界史』を検討した。

一九九八年九月一八日～二〇日に一橋大学を会場として第一回日韓歴史共同研究シンポジウムを開催した。教科書の検討結果について、日本側は池享（前近代史）・吉田裕（近現代史）が、韓国側は南基鶴（前近代史）・権泰楹（近現代史）が報告した。また特別報告として李泰鎮が「韓国侵略に関する諸協定のみ破格であった」を、糟谷憲一が「朝鮮の植民地化の過程をどうとらえるのか」を報告した。この第一回シンポジウムの内容は、一九九九年一月に報告書として刊行した。

ついで一九九九年の第二回シンポジウムに向けて、日本側では、韓国の大学教養課程向けの概説書である李基白『韓国史新論』（ソウル・一潮閣、一九九八年新修重版）を検討した（糟谷憲一及び研究補助者の大学院学生・辻弘範が日本語

訳したものを使用した)。韓国側では、日本の大学教養教育教科書である竹内誠・佐藤和彦・君島和彦・木村茂光編『教養の日本史』(東京大学出版会、一九九五年の第二版)を検討した。なお、一九九九年四月より森武磨(一橋大学経済学研究所)が参加した。

第二回シンポジウムは一九九九年八月二三日～二五日にソウル大学校で開催された。大学生向け概説書・教科書の検討結果について、日本側は糟谷憲一・若尾政希(前近代)、中村政則・吉田裕(近現代)が報告し、韓国側は南基鶴(前近代)、金容徳・都珍淳(近現代)が報告した。また特別報告として池亨が「日本戦国時代史研究の現状」を、金基奭が「開化期教育改革」を報告した。第二回シンポジウムの内容は、二〇〇〇年三月発行の報告書として公表した。なお李基白教授から二〇〇〇年二月に「拙著『韓国史新論』についてのご意見について」と題するコメントが寄せられた。その内容は韓国における研究の現状と水準を確認する上においてきわめて貴重なものであった。この李基白教授のコメントは別途印刷して、報告書に挿入した。

第二回シンポジウム後、次回以降は日本史、朝鮮史、日朝関係史研究上の重要問題を逐次検討していくことを、日韓双方で確認した。日本側では報告の準備活動を行う一方、孫承喆「近世の日本と朝鮮―交隣関係の虚と実」(鈴木信昭監訳、山里澄江・梅村雅英訳、明石書店、一九九八年)を検討して、近世日朝関係史について参加者の認識を深めるのに努めた。

第三回シンポジウムは二〇〇〇年八月二五日～二七日に一橋大学で開催され、六本の研究報告(南基鶴「一〇」―三世紀の東アジアと高麗・日本」、渡辺尚志「日本近世・近代移行期村落社会研究の現状と課題」、張寅性「人種」と「民族」の差異―東アジア連帯論の地域的アイデンティティと「人種」―、権泰檀「同化政策論」、都珍淳「韓半島の分断と日本の介入」、H・P・ビックス「天皇と朝鮮植民地支配」)が行われた。第三回シンポジウムの内容は、二〇〇一年五月に報告書として公表した。

第四回シンポジウムも第三回と同じ方式で準備された。日本側では報告の準備活動を行う一方、李泰鎮『朝鮮王朝社会と儒教』（六反田豊訳、法政大学出版社、二〇〇〇年）を検討し、朝鮮近世史について参加者の認識を深めるのに努めた。なお、日本側では朝鮮史研究者が一人しかいないため、一橋大学外の四人の朝鮮史研究者、李成市（早稲田大学文学部）、並木真人（フェリス女学院大学国際交流学部）、月脚達彦（東京外国語大学外国語学部）、林雄介（明星大学日本文化学部）を加えて、体制の強化をはかった。韓国側でも新たに鄭肯植（ソウル大学校法科大学教授、韓国法制史）、李根寛（建国大学校法科大学教授、国際法）が加わった。第四回シンポジウムは二〇〇一年八月二四日～二六日にソウル大学校で開催され、六本の研究報告（李成市「新しい歴史教科書」古代史叙述をめぐって、鄭肯植「朝鮮中期、祭祀承継の実態―安東周村、真城李氏家門の例―」、若尾政希「日本近世における儒教の位置―近世前期を中心に―」、李泰鎮「両班文化、なぜ罵倒されたか」、金容徳「京城帝国大学の教育と韓人学生」、森武磨「戦前と戦後の断絶と連続―日本近現代史研究の課題―」）が行われた。

以上のように、「ソウル大学・一橋大学歴史共同研究」では、歴史教科書の検討から出発して、両国における歴史研究の現状と課題意識を相互に理解することの必要性を認め、重点を歴史研究そのものに移して研究上の重要問題を取り上げて率直に討論することを追求するようになった。このことによつて、民族のとらえ方、社会編成、権力構造、在地支配、村落、支配的な政治思想などの点について日本と朝鮮とを比較すること、両国の歴史を東アジアという場でとらえていくこと、日本と朝鮮との関係をより具体的に把握していくことの重要性が、明確になってきた。そのため、これらの点に関する研究を進めることを今後の課題として設定した。この課題に接近するため、二〇〇一年一〇月、科学研究費補助金、基盤研究（B）「日本史研究における東アジア認識の再検討」（研究代表者・吉田裕）を申請した。

二〇〇二年四月に科学研究費補助金の交付内定の通知を受け、これに対応して研究の実施体制を再編した。同年五月

に本研究会を推進する研究会として「東アジア認識」研究会を発足させた。二〇〇二年度はシンポジウムの準備報告を中心にして研究会を開催した。第五回シンポジウムは二〇〇二年八月二三日～二五日に一橋大学で開催され、五本の研究報告（南基鶴「鎌倉時代における「武威」の側面―中世日本の自己認識の一形態―」、山内民博「倭乱の記憶 邑誌の中の壬辰丁酉倭乱」、李根寛「東アジアにおけるヨーロッパ国際法の受容に関する一考察―国際法用語の翻訳及び流通を中心に」、朴明圭「一九二〇年代朝鮮の「社会」認識と個人主義」、渡辺治「現代日本のナショナリズム」）が行われた。第五回シンポジウムの報告書は、未刊行であった第四回シンポジウム報告書とともに、二〇〇三年三月に刊行した。

二〇〇三年度もシンポジウムの準備報告を中心にして研究会を開催した。第六回シンポジウムは二〇〇三年八月二二日～二四日にソウル大学校で開催され、六本の研究報告（池享「前近代東アジアの貨幣と国家」、鄭肯植「訴訟と韓国法の伝統」、李泰鎮「雲揚号事件の真相」、李根寛「伝統的東アジア国際秩序の観点からみた一八七六年の朝日修好条規」、糟谷憲二「閔氏政権の権力構造とその開化政策・外交政策」、吉田裕「靖国神社問題の現在」）が行われた。第六回シンポジウムの報告書は、二〇〇四年三月に刊行した。

第六回シンポジウムの後、二〇〇四年一月に歴史教育研究会編『日本と韓国の歴史共同教材をつくる視点』（梨の木舎、二〇〇三年）の検討会を行うことを決め、同年二月から七月にかけて五回に分けて検討会を開いた。第七回シンポジウムは二〇〇四年八月二〇日～二二日に一橋大学で開催され、四本の研究報告（李賢恵「韓半島青銅器時代の島作―晋州大坪里遺跡を中心に―」、林雄介「間島における一進会」、権泰億「一九一〇年代朝鮮総督府の植民統治と「文明化論」」、加藤哲郎「二二世紀に日韓現代史を考える若干の問題」）が行われた。第七回シンポジウムの報告書は二〇〇五年三月に刊行した。

二〇〇五年度はシンポジウムの準備報告を中心にして研究会を開催した。第八回シンポジウムは二〇〇五年八月二六日～二八日にソウル大学校で開催され、五本の研究報告（蔡雄錫「韓国中世時期における姓と本貫の定着」、月脚達彦「朝鮮開化派の東アジア認識」、李根寛「日本の韓国併合過程における国際法上中立の問題に対する考察」、半澤健

市「日本財界人の戦争認識——太平洋戦争を中心に——」李泰鎮「大韓帝国のソウル（京城）都市改造事業（一八九六・九）一九〇四・二」が行われた。第八回シンポジウムの報告書は二〇〇六年三月に刊行された。

二〇〇二年度～二〇〇五年度の研究活動は、上記の科学研究費補助金に支えられて行われたが、引き続き科学研究費補助金の交付を申請することとし、二〇〇五年一〇月に科学研究費補助金、基盤研究（A）、「日本と朝鮮の間の相互認識に関する歴史的研究」（研究代表者：吉田裕）を申請した。二〇〇六年四月に採択内定の通知を受け、二〇〇六年度～二〇〇九年度にわたって「日韓歴史共同研究」を継続することになった。

第一回、第二回シンポジウムにおける各二本の特別報告を含めて、四一本の研究報告が行われた。考古学から現代史に至るまで、朝鮮史、日本史、日朝関係史、東アジア史に関わる多岐な論点を取り上げられ、両国における歴史研究の到達点や課題意識をより深く知る上で、貴重な成果を得ることができた。また、シンポジウム報告書を六〇〇部印刷して、主に日本の歴史研究者・歴史教育者に配布したことも、日韓両国における歴史研究の現状を広く知らせるために役立つことができたと言える。

二. 歴史認識に関わる交流の課題

次に、八年間の「日韓歴史共同研究」を経験して、日韓間の歴史認識に関わる交流を進めるに当たって、直面している、また直面することになるであろう課題は何かを、簡単に指摘しておきたい。

(二) 歴史教育と歴史研究との関係

歴史教育は歴史研究の成果をふまえて行われなければならないのであるが、このことは実践的にはかなり難しいことである。例えば、高等学校の歴史教育の段階で何を教えたらいのか、教えるべきかは、大きくは歴史教育の到達目標の設定の問題であり、個々にはその到達目標への接近に資するような、教える素材、教材の選択の問題である。こうした教育の到達目標の設定や教材の選択の問題といったレベルにおいて、歴史研究の到達水準が反映されていなければならぬ。「歴史教育は歴史研究の成果をふまえて行われなければならない」を、歴史教育の現実の営みに即して理解するとすれば、このようなことになるのではなからうか。それは、歴史研究は歴史教育にどのように役立つことができるのか、連携することができるのか、ということである。

ここでは詳しく展開することはできないが、歴史教育と歴史研究との関係が、日韓両国ではそれぞれどのようなになっているかは、考察を要する課題である。

(二) 歴史研究における認識の相違と交流

日本と韓国では、歴史研究における認識は当然に違っている。韓国の歴史研究では韓国史が中心であり、近隣諸国の歴史である日本史研究や中国史研究の比重は高くない。日本の歴史研究は日本史研究が中心であるが、中国史研究は分厚く、朝鮮史研究も原始・古代から現代まで研究者を擁して体系的な研究が行われている。

私たちの研究交流は、韓国の韓国史研究者と日本の日本史研究者が多数を占める形で行われてきたが、日本の日本史研究者には、朝鮮史に関する知識がやや不足していることは否定できない。朝鮮の前近代社会は、社会の構造、権力構造、思想など多くの面にわたって、同時期の日本とも中国とも違う面を持っている。これらの点は、ささやかではあるが日本の朝鮮前近代史研究者が解明してきたことでもある。当然のことではあるが、対象とする社会自体の相違に基づく認識の相違があるということについて、とくに留意する必要がある。

(三) 朝鮮史認識、日朝関係史の認識を拡げ、深化させるために

高校の歴史教科書において、朝鮮史・日朝関係史に関する叙述は日本史・世界史に分かれて掲載されている。東アジア史なので、日本史・世界史の双方に載っているということであるが、中国史叙述は世界史教科書に詳細であるのに対し、同じ世界史教科書における朝鮮史叙述は至って貧弱である。これでは、朝鮮史に関する体系的な理解を得るのには、高校教員の自発的な教材研究と熱心な実践に頼るほかはない。

朝鮮史に関する理解を深めることを、世界史教育の目標として明確にし、体系的な叙述を世界史教科書に掲載すべきであろう。日本の朝鮮史研究の水準は、そのことを可能なほどには到達している。日韓間の「歴史認識」のギャップが問題にされているが、多くの歴史教員が朝鮮史に関する基本事項・基本知識を丁寧に見えることが、まず必要である。もちろん、きちんと教え、知識を増すようにしても、なお近代日本の朝鮮に対する侵略政策や植民地支配を肯定したり、蔑視する言動が完全にならなくなるとは思われない。しかし、無知に根ざす偏見を無くしていくことは急務であろう。

おわりに

以上で私の報告を終えるが、急いで用意したので、「歴史認識に関わる交流の課題」は充分には展開できていない。忌憚のないご批判を乞いたい。

日韓歴史共同研究シンポジウム一覧

第一回日韓歴史共同研究シンポジウム 一九九八年九月一八日(金)～二〇日(日)

○第一日目 レセプション 於…一橋大学佐野書院応接室

○第二日目 報告・討論 於…一橋大学佐野書院応接室

韓国国定高校歴史教科書を読んで

池 享「前近代部分について」 吉田裕「近現代の叙述について」

日本高校歴史教科書（山川出版社）「詳説日本史」「詳説世界史」を読んで

南基鶴「韓国史関連記述の検討（近代以前）」

権泰憶「日本歴史教科書の検討（近現代）」

特別報告

李泰鎮「韓国侵略に関する諸協定のみ破格であった」

糟谷憲一「朝鮮の植民地化の過程をどうとらえるのか」

○第三日目 総合討論 於…一橋大学佐野書院応接室

総合討論

第二回日韓歴史共同研究シンポジウム 一九九九年八月二三日（金）～二五日（日）

○第一日目 レセプション 於…ソウル大学校湖巖教授会館、Lilly Room

○第二日目 報告・討論 於…ソウル大学校法科大学教授会議室

『韓国史新論』の検討

糟谷憲一「序章・終章、第一～第八章」、若尾政希「第九～十二章」

中村政則「第三章」、吉田 裕「第一四～一六章」

『教養の日本史』の検討

南基鶴「前近代について」、金容徳「近現代（前半）について」

都 珍 淳「近現代（後半）について」

特別報告

池 享「日本戦国時代史研究の現状」

金 基 爽「開港期の教育改革」

○第三日目 総合討論 於…ソウル大学校法科大学教授会議室

総合討論

第三回日韓歴史共同研究シンポジウム 二〇〇〇年八月二十五日（金）～二十七日（日）

○第一日目 レセプション 於…立川市・パレスホテル立川

○第二日目 報告・討論 於…一橋大学佐野書院応接室

南 基 鶴「一〇〇～一三世紀の東アジアと高麗・日本」

渡辺尚志「日本近世・近代移行期村落社会研究の現状と課題」

張 寅 性「人種」と「民族」の間―東アジア連帯論の地域的アイデンティティと「人種」―

権 泰 憶「同化政策論」

石川直義「国際歴史教科書の理想と問題点」

○第三日目 報告・討論 於…一橋大学佐野書院応接室

都 珍 淳「韓半島の分断と日本の介入」

H・ビックス「天皇と朝鮮植民地支配」

総合討論

第四回日韓歴史共同研究シンポジウム 二〇〇一年八月二四日(金)～二六日(日)

○第一日目 レセプション 於…ソウル大学校湖巖教授会館、Jilly Room

○第二日目 報告・討論 於…ソウル大学校法科大学教授会議室

李成市「『新しい歴史教科書』古代史叙述をめぐって」

鄭肯植「朝鮮中期、祭祀承継の実態—安東周村、真城李氏家門の例—」

若尾政希「日本近世における儒教の位置」

李泰鎮「両班文化はなぜ罵倒されたか」

李根寛「伝統的東アジア国際秩序の観点からみた一八七六年の朝日修好条規」

金容徳「京城帝国大学の教育と韓人学生」

森 武鷹「戦前と戦後の連続と断絶—日本近現代史研究の課題—」

華城(水原)踏査

○第三日目 総合討論 於…ソウル大学校法科大学教授会議室

第五回日韓歴史共同研究シンポジウム 二〇〇二(平成一四)年八月二三日(金)～二五日(日)

○第一日目 レセプション 於…立川市・パレスホテル立川、「櫻」

○第二日目 報告・討論 於…一橋大学佐野書院応接室

南基鶴「鎌倉時代における「武威」の一側面—中世日本の自己認識の二形態—」

山内民博「倭乱の記憶 邑誌の中の壬辰丁酉倭乱」

李根寛「東アジアにおけるヨーロッパ国際法の受容の関する一考察—国際法用語の翻訳及び流通を中心に—」

朴明圭「一九二〇年代朝鮮の「社会」認識と個人主義」

○第三日目 報告・討論 於…一橋大学佐野書院応接室

渡辺 治「現代日本のナショナリズム―昂揚と分岐の背景」

午後、吉田裕教授の案内で靖国神社見学

第六回日韓歴史共同研究シンポジウム 二〇〇三(平成一五)年八月二二日(金)～二四日(日)

○第一日目 レセプション 於…ソウル大学校湖巖教授会館、Lilly Room

○第二日目 報告・討論 於…ソウル大学校国際大学院一四〇棟一〇四号室

池 享「前近代東アジアの貨幣と国家」

鄭肯植「訴訟と韓国法の伝統」

李泰鎮「雲揚号事件の真相」

李根寛「伝統的東アジア国際秩序の観点からみた一八七六年の朝日修好条規」

糟谷憲一「閔氏政権の権力構造とその開化政策・外交政策」

吉田 裕「靖国神社問題の現在」

○第三日目 江華島一帯踏査(甲申砲台址、江華歴史館、支石墓、江華留守府・外奎章閣址、広城堡砲台址、草芝鎮砲台址)

第七回日韓歴史共同研究シンポジウム 二〇〇四(平成一六)年八月二〇日(金)～二二日(日)

○第一日目 レセプション 於…立川市・立川駅ビル「グランデュオ」七階「龍福園」

○第二日目 報告・討論 於…一橋大学佐野書院応接室

李賢恵「韓半島青銅器の島作―晋州大坪里島遺跡を中心に―」

林 雄介「間島における一進会」

権 泰 樟「一九一〇年代朝鮮総督府の植民統治と「文明化論」

加藤哲郎「二一世紀に日韓現代史を考える若干の問題」

○第三日目 佐倉市・国立歴史民俗博物館見学

第八回日韓歴史共同研究シンポジウム 二〇〇五(平成一七)年八月二六日(金)～二八日(日)

○第一日目 レセプション 於：ソウル大学校湖巖教授会館、Lilly Room

○第二日目 報告・討論 於：ソウル大学校エンジニアハウス「金龍」

蔡 雄 錫「韓国中世時期における姓と本貫の定着」

月脚達彦「朝鮮開化派の東アジア認識」

李 根 寛「日本の韓国併合過程における国際法上中立の問題に対する考察」

半澤健市「日本財界人の戦争認識—太平洋戦争を中心に—」

李 泰 鎮「大韓帝国のソウル(京城)都市改造事業(一八九六・九〇～一九〇四・二)」

○第三日目 坡州出版都市、臨津閣、非武装地帯(DMZ)等踏査